資料　3

第20回　昭和館見学作文コンクール昭和館特別賞作品

No	学校名	学年	氏名	作品数	入賞
1	学習院初等科	小2	髙瀬奈々	1	昭和館特別賞
2	日本女子大学附属豊明小学校	小2	小野美南海	1	昭和館特別賞
3	品川区立小山小学校	小6	白井咲羽	1	昭和館特別賞
4	札幌市立八条中学校	中2	片岡菫	1	昭和館特別賞
5	札幌市立八条中学校	中2	佐脇花奈実	1	昭和館特別賞

000001

昭和館特別賞

手紙

学習院初等科二年高瀬　奈々

十一月二日（火）に、しょうわかんへ行きました。

とくに心にのこったのは手紙です。どうしてかというと、むかし、わたしが「せんそう」のお話の本を読んだ時のことを思い出したからです。

ある日、せんそうがおきてしまいました。一つの家ぞくは子どもがいました。せんそうはこわいと思うおとうさまは、子どもたちだけをちがう場しょにひなんさせました。けれども、おかあさまは心ぱいなので、「このはがきに丸やばつをつけて、毎日おくりなさい。」と言います。しばらくすると、はがきが来ません。どうしたのだろう。と思うと、子どもたちは帰ってきてしまいました。

この子どもたちはさびしかったから帰ってきたのだと思います。しょうわかんで見た手

紙を書いた人たちも、おかあさまやおとうさまに会えないのがさびしいだろうと思いました。

もう一つ心にのこったのは、手紙の中で書いている内ようです。せんそうの時は、「さびしい。」「いやだ。」「かなしい。」などの言はをつかってはいけなかったそうです。いけない言ばは、黒くぬりつぶされ、それを黒ぬりと言いました。びどいなと思いました。

手紙はととても小さな字で、ぎっしり書いてありました。絵を書いている手紙もありました。むかしは、けいたいも、ズームも、会いに行くこともできなかったので、きちょうだった紙に思いをたくさんつめていたのだと思いました。しかもとてもていねいで、心のこもった手紙だったので、大切に今ものこっているのだなと思いました。

本ものの手紙を見ることができて、べん強になりました。

000003

昭和館特別賞

水くみとせんたくをやってみて

二年　小野美南海

しょうわかんには、一番さい後に「体けんひろば」があります。むかしの人のくらしをじっさいに体けんできるというので楽しみにしていましたが、コロナでお休みでした。わたしは、井戸ポンプでの水くみがどうしてもやりたかったので、いろいろな場しょに電話をかけて、

「井戸ポンプはつかえませんか？」

「井戸ポンプはつかえませんか？」と聞いてみましたが、どこもこしょうしていたり、にごった水しか出ないということで、ことわられてしまいました。わたしは考えて、考えたすえ思いつきました。

一つ目は、水くみだけでもやってみて、おふろにためてみよう、ということ。二つ目は、せんたくいたで今日一日分の自分のようふくをあらってみよう、ということです。台どころでバケツに少しずつ水を入れてはこんで、

ゆびねに『よっこらしょ、よっこらしょ』と水を入れていきます。いっぱいになるまでになんとバケツ七十八ぱい、一時間と一分もかかりました。さい後は、とてもつかれてうでがいたくなりました。今は、ボタンをポチッとおせばかんたんにおゆがたまるのに、これを毎日やっていたむかしの人たちは大へんだったろうな、すごいなぁ、とおもいました。

つぎはせんたくです。せんたくいたは元も

と家にあったので、それをつかいました。石

けんでようふくをあらうのはあまりかんたんではありませんでした。でもその分、ロぴしゃん、ぴとん、つるんロなどのさまざまな音が聞こえてきて楽しかったです。あの時、石けんであらったようふくは、今でもいいにおいがします。

じっさいにやってみていろいろなことが分かりましたが、ぎもんもたくさん出てきました。もし、せんそうやさいがいで水が止まったら、たべものとのみものはどうするの？水

はどこからくむの？家がこわれてしまったら
どうするの？もしも今そんなことがおこったら、わたしたちはあっという間にしょうわのせかいにぎゃくもどりしてしまいます。
わたしが思うのはただ一つ、今みたいなへいわなくらしがずっとずっとつづくことです。

0.00002

昭和館特別賞

「食のありがたさ」

小山小学校六年　白井咲羽

日々の食事。これについてありがたさを感じたことはあまりなかった。しかし、昭和館を訪れてその考えは変わった。昭和館で見た昔の子供達は、学校での給食ごろか食事も十分にとれない日々を過ごしていた。一日の食事はすいとんだけ、という日もある。戦争で日本自体が貧しく、来るか来ないかの配給を心持ちにする。十分に食べることはできなくても、たとえすいとんだけだ。たとしても友達や家族と食べるご飯はとても美味しく、楽しい。食は国民の宝物。想像する以上に厳しい時代だった。戦時中には、親元を離れて田舎に疎開することがあった。疎開先での食事は質素なものではあったが、皆で食べるご飯はとてもおいしかったそうだ。「食事は人の心を豊かにしてくれる」。これは、私が昭和館で学んだことの一つだ。

現在日本に住んでいる大半の人が一日三食食べられるし、学校に行けば毎日違う献立の

栄養バランスの良い給食が出てくる。戦争に行って戦うことが最大の使命だった戦時中の人の気持ちになって考えると、三食十分に取れることは他の何にも変えられないくらいありがたいことだと思う。

しかし、食事を取るのは当たり前だという意識だと、昭和館に行く前の私のようにありがたさを忘れてしまう。「食事は人の心を豊かにしてくれる」ということにも気づかない。

今、日本では核家族が多い。コロナもあり、家族や親族のみんなで食卓を囲みご飯を食べる機会が減っている。昔は家族全員でご飯を食べていた。豪華な食事でなくてもみんなでご飯を食べるご飯は、格別だった。食事の本当のありがたさを知るためにも、戦争のことを知る必要がある。戦争中は、私たちが思っているよりも何倍も過酷な生活だったからこそ、「食べること」を真剣に考えたのだ。私は食事のありがたさを考えてこれから生活していきたいと思っている。

000004

No. 1

昭和館特別賞

札幌市立八条中学校

当たり前じゃない幸せに感謝

戦争、と一言で言われても、私には容易に想像がつかない。経験したことが無いのだから、当然である。戦争といえば、歴史の授業で当時の出来事について知ったり、写真を見たりするくらいだ。当時生活していた人々に思いを馳せるなど、したことが無かった。

日本では毎年、終戦記念日である八月十五日に合わせて、全国戦没者追悼式が行われている。私は夏休み中、式の中継映像を見た。今まではそれを見ても、思うことは特に無かった。が、今年は何か心にひっかかるものがあった。コロナで様々な催しが中止されている今、なぜそこまでして行う必要があるのだろう。戦没者を弔うこと意外に、何か意味があるのだろうか。

昭和館の戦争証言映像"オーラルヒストリー"には、たくさんの戦争体験者のエピソードがある。私が今回見たのは、喜田清さんのオーラルヒストリーだ。喜田さんは、戦中・戦後

の学校生活について語っていた。この動画を選んだのは、今の自分の学校生活とより比べやすくするためだ。

私は、どうせ子どもたちだけ疎開して、空襲から逃れていただけだろうと思っていた。しかし、実際はそれだけではなかった。そもそも現在と戦中では学校の名称や仕組みが異なるのに加え、男子は戦闘訓練をさせられ、木刀や竹槍で人を突く練習をしていたという。さらに、国内の食糧が不足してくると、学校の運動場を耕して畑にし、大豆やさつまいもなどを育てたそうだ。このような話を聞いていると、当時の子どもたちがいかに戦争によって我慢を強いられていたかがよく分かる。

人を傷つけ、殺めることは、今となっては重い罪だが、昔はアメリカ兵を殺し、国のために命を落とすことが素晴らしいことであり、名誉なことだったのだろう。そんな教育を当時の子どもたちに施していたという事実に、私は驚いた。そして、その子どもたちはき。

と、終戦以降の"本当の教育"についていけなかったのだろうと、私は思う。

現代の人々は、追悼式を行うことで、当時の人々に思いを馳せ、二度と戦争を繰り返さないという志を共有している。戦争体験者の話を聞き、戦争に対する意識が変化した今なら、そう思える。

食べる物が充分に手に入る生活。高度な教育を受けられる生活。戦争のない生活。安心して暮らせる世界。なんて幸せなのだろう。今世界には、紛争が起きていたり、食糧や教育が充分ではない国がたくさんある。幸せは、当たり前ではない。今自分が普通に暮らせているということに感謝しながら、私は今日も生きている。

000005

昭和館特別賞

札幌市立八条中学校

「感謝と尊重する気持ちを持って」

佐藤　花奈実

「戦争」この言葉からあなたはどのような感情を抱きますか。怖い、悲しいなどと感じる人が多いと思います。私は、怖いという感情とともに、なぜ同じ人間が互いに攻撃し合い傷つかなければならなかったのだろうと疑問に思います。出征した人の中には中学生だった人もいたそうです。今では考えられないような事が起きていた時代はどれだけ過酷だったことでしょう。小さい子どもも鉄を売ってお金を稼いだり、農業用水を供給するための水でお風呂に入ったり、つらい日々を送っていた人々が今私達が住んでいる日本という場所にも存在していたのです。その反面、今の私達はどうでしょうか。大低の人は、勉強ができる環境があり、おいしいご飯も食べることもできていると思います。ですが、これはあたりまえな事ではないのです。むしろ恵まれた環境で生活できている事に感謝して過

ございなければならないと私は思っています。
また、感謝と共に、戦争を忘れないことも大切だと思います。では、戦争を忘れないというのはいったいどういうことでしょうか。
私は、戦争を忘れないとは、また起こらないようにするためにどんなものなのかをしっかり考えるということだと思いました。たくさんの人の命をうばうものだということ、どれだけの人が苦しんだのか、それらのことを受け、次に継いでいかなければならないと思います。なぜなら、人々が忘れたころに戦争が起こってしまってはたくさんの人がまた苦しむことになってしまうためです。
さらに、私達自身はどうしてゆくことが大切なのでしょうか。私は、相手の立場を尊重する気持ちを持つことができなかった事が要因の一つと考えています。ですから、世界中の人々が相手の立場になって物事を考えたり尊重する気持ちをもったりするという意識をしてゆかなくてはならないと思います。そう

簡単ではないことではありますが、将来をつくる一員として一人一人が努力する必要があります。

このように、戦争は決して他人事ではありません。忘れてはいけないことなのです。戦争を体験したかたはこう言っています。

「戦争は絶対にダメです。為政者のひとつの放針が全体を変えてしまう。あってはならないことであり、語り継がなければなりません。」

くり返しになりますが、体験談を聞いて私が考えた事は戦争というものがもう二度と起きてほしくないし、そのために、自分も思いやりの心を持って命を大切にしていきたいと思ったことです。